



可憐な意匠

— 黒漆塗系柳蒔絵中次 —

茶の世界では、濃茶を入れる茶入に対して、薄茶を入れる容器を総称し薄茶器あるいは略して薄器と言います。薄茶器は、棗と中次を基本形に多種多様のものがあり、材質も漆器を主体に木地・象牙・金属・一閑張など豊富です。

ところでこの薄茶器、いつごろ出現したのかはなはだ曖昧です。従来は、江戸時代の元禄年間（1688～1704）に数内竹心が著した『源流茶話』の一文がその拠り所となっていました。この書は三巻からなり、問答風に茶道の源流を説いたものですが、その中に「棗八子壺の挽家 中次八かたつきのひき家より見立られ候」とあります。つまり、小壺や肩衝の茶入を保存する容器である挽家が、棗形と中次形おのおの薄茶器が生まれたというわけです。ところが茶入の挽家を調べても、江戸時代以前にさかのぼる作例を確認することはできません。では、江戸時代より古い薄茶器は存在しなかったということでしょうか。鎌倉

時代末期から室町時代に盛行した「闘茶」の時代、あるいは飲茶の裾野を大きく広げる「一服一銭」の時代、しだいに高まる抹茶の需要の中で、その容器はひとり陶製の茶入に依存してきたのでしょうか。

当時の文献や絵画資料をひもとくと、抹茶の容器として茶入のほかにも「茶桶」や「薬器」などと称した塗りの存在が散見されます。いまだ棗や中次などの称は用いられていませんが、どうやら「茶桶」や「薬器」を薄茶器の起源とみてよさそ



▲黒漆塗系柳蒔絵中次 (彦根城博物館蔵)

うです。ただし、このころは抹茶といえは濃茶が主体であったようであり、したがってそれを入れる容器の分化は、いまだなされていなかったでしょう。やがて「侘茶」が流行するようになり、従来の濃茶とともに、味わいが淡泊で廉価な薄茶もさかんに飲まれるようになって、その容器も茶入と薄茶器の二種にしたいに明確に分けられるようになってきたものと思われま

す。以上、薄茶器の起源について述べてきました。その後の薄茶器の命運は華々しく、冒頭に述べたような多種多様のものが制作されて今日に及んでいます。

彦根藩主井伊家に伝来した薄茶器は、その数・器種ともに豊富で、総数は100点に近いものがあります。その中でひととき可憐な意匠で注目されるのが今回紹介する中次形の薄茶器です。

金と黒、陽と陰で表された系柳（しだれ柳）の太い枝から、細い枝がまるで五月雨のようにしだれる中を、燕のかるやかに舞う意匠です。この作品を納めた箱の蓋表には「時代写系柳蒔絵 中次 一国齋（一国齋無双印）」とあります。

一国齋は、もと伊勢松坂白粉町の人で、沢木正平が本名。大坂で漆芸を修業し、文化8年（1811）名古屋に移って尾張藩小納戸御用塗師となりました。名手の呼び声高く、名古屋城にちなんで金城（国齋）初代）を名乗り、無双とも号したようです。

（彦根城博物館学芸員 谷口 徹）

写真の薄茶器は、彦根城博物館のテーマ展「井伊家伝来の茶道具―薄茶器―」で5月16日(金)から6月17日(火)まで展示します(期間中無休)。